

まえがき

「新しい歌を主に向かって歌え。喜びの叫びとともに、巧みに弦をかき鳴らせ。」 詩篇 33 篇 3 節

今から 140 年前の 1872 年、最初の日本語讃美歌である「エスワレヲ愛シマス (Jesus Loves Me)」と「ヨキ土地アリマス (Happy Land)」が宣教師によって翻訳され、公にされました。たった 2 曲の、今から見ればつたなくも思える翻訳から始まった日本語讃美歌でしたが、この小さな実からやがて大きな実りがもたらされることとなります。日本語讃美歌は、時とともにより歌いやすいものに練り上げられ、内容も深まり、数も増え、日本語による創作讃美歌も生み出されるようになりました。こうして生まれた多くの日本語讃美歌と、それらを収めた讃美歌集は、この国で礼拝と信仰の養いと宣教のために大いに用いられてきました。

『教会福音讃美歌』は、この国で、そして世界中でこれまでに生み出され歌い継がれてきた讃美歌を、敬意と感謝の念を持ちつつ、大切な信仰の財産として受け継いでいます。

ここ 10 数年の国内の状況を顧みると、様々な教団教派から新しい讃美歌集が相次いで発行されるようになり、そのような動きに触発されて、福音派諸教会の中にも新しい讃美歌と讃美歌集を求める声が聞かれるようになりました。

そこには幾つかの理由があると考えられます。

第一に、福音的な信仰理解の深まりです。教会の一体性や礼拝の共同性が深く意識されるようになり、それに伴って、礼拝において「私」

個人の思いや告白を歌うだけでなく、「私たち」を召し集め、導き用いてくださる主とその御業を歌うことも求められるようになりました。

第二に、1974年のローザンヌ世界伝道会議以降、福音派の諸教会においても教会の社会的責任について深い考察が向けられるようになったことです。変化し続ける現代社会とそこに存在する特有な問題に応えるにふさわしい讃美歌が求められるようになりました。

第三に、日本語のことばの変化です。かつては一般の人々にも理解され受け入れられていた讃美歌のことばが、今日では青年層や新しく来会される方はもとより、すでに教会に集っている人々にも難しいと感じられるようになってきました。美しさとともに、分かりやすく心に届く讃美のことばが求められています。

第四に、今も、世界中で新しい讃美歌が絶え間なく生み出されているという事実です。教派や世代を超え、信仰を同じくする人々の間で、優れた讃美歌を共有し、一つ心で讃美することへの求めがあります。

福音讃美歌協会（JEACS）は、このような時代の要請を受けて、教会の業として『教会福音讃美歌』編纂に取り組んできました。編纂にあたっては以下の点に心を配りました。

まず、礼拝に集う会衆が、ともに声を合わせて讃美するために用いられる讃美歌集であること。

次に、変わることはない福音を大切にしつつ、新しい時代にふさわしく、教会および信仰者の意識の変化と深まりに応える讃美歌集であること。

選曲にあたっては、礼拝にふさわしい作品を、時代、ジャンル、スタイルをこえて積極的に収録すること。

福音唱歌や敬虔主義的な内容の讃美歌について積極的に評価し、現代にふさわしい形で収録すること。

このような思いと祈りを持ち、心を注いで編纂に当たってきましたが、なお至らないところの多くあることを覚えます。いま願うのは、主がこの『教会福音讃美歌』を祝福してくださり、主の教会の礼拝讃美が豊かにされ、主の民の信仰の高揚と福音宣教のために、この時代にあって用いられることです。

最後になりましたが、この働きのために御理解と御協力をいただきました著作者、著作権者、関係諸団体の皆様に、そして、いつも祈り、励まし、支えてくださった皆様に心から感謝申し上げます。

何よりも、弱く欠けの多い者たちをこの働きに召し、ここまで導き用いてくださった忍耐と励ましの神に、心から感謝と讃美をおささせていただきます。

2012年7月

福音讃美歌協会 讃美歌委員会

使い方

音楽について

音楽に関しては伝統を大切にしつつ、演奏しやすくなるよう工夫しました。音が高く歌いにくい讃美歌はできる限り、歌いやすい音域に下げました。弾きにくい調の曲もできる限り、弾きやすい調に移調しました。ただし原調がふさわしいと判断した曲は、手を加えませんでした。

楽譜には1段のものから3段のものまであります。

1段の楽譜は、歌の旋律譜です。伴奏はコードネームを参考にして自由に付けてください。

2段の楽譜は基本的に、ソプラノ、アルト、テノール、バスの4パートを合わせた形になっています。一般的には、旋律はソプラノにあり、会衆讃美では全員がそこを歌いますが、パートに分かれて歌うこともできます。鍵盤楽器で弾こうとすると手が届かない場合があります。その場合は届かない音を、オクターブ上げ下げするか省略するなど、工夫してください。

3段の楽譜は、最上段が歌の旋律譜、下の2段が鍵盤楽器のための伴奏譜になっています。伴奏譜の中には、足鍵盤付のオルガンで弾くことを前提にしたものがあり、手鍵盤だけでは手が届かない場合があります。その場合は届かない音を、オクターブ上げ下げするか省略するなど、工夫してください。

コードネームは、ギターやベース、キーボード等での伴奏を前提に付けてあります。2段、3段の楽譜に記されている和音と同時に演奏

すると不協和になる場合がありますので、コードネームによって伴奏する場合はすべての伴奏楽器でコードネームに基づいて演奏するようにしてください。なお「C/G」は、和音がC、ベース音がGであることを表しています。

不規則な拍子の曲（2拍子と3拍子が混在している曲等）について、煩雑さを避けるために拍子記号を省略したものがあります。

速さの指定は、原作者の指示がある場合を除き省略しました。適切な速さは状況によって異なるからです。

歌詞について

歌詞は、楽譜内（音符の下、原則として左頁）と楽譜外（原則として右頁）の2か所に記載しました。歌詞が5節までのものは楽譜内にも全節記載しましたが、6節以上あるものは原則として4節までを楽譜内に記載し、5節以降は楽譜外の歌詞を参照していただくようにしました。

節の多いものは、必ずしもすべての節を歌わなければならないものではありません。歌われる状況に合わせて節を選んでいただくことができます。その場合は、説教者、司式者、奏楽者などで事前によく打ち合わせ、週報等に記載されるとよいでしょう。

歌詞については、現代の言語感覚を大切にしながら、分かりやすく美しく歌いやすいものとなるように心がけました。口語化には積極的にとりくみましたが、文語であっても分かりやすく良いものは、そのまま採用しています。一つの歌詞の中に文語と口語が混在しているも

のがありますが、これは、ことばの面でも、音楽面でもさまざまな制約のある讚美歌詞において取り得る選択肢の一つとして受けとめました。また、日本語として難解な部分を含むものでも、一般社会にも広く知られ愛唱されている作品は、あえて手を加えずそのまま採用しました。

この歌集のための作詞、翻訳については、下記のように一定の方針に沿って作業を進めました。

1. 漢字は常用漢字を用い、送り仮名は本則に拠るように心がけました。
2. 句読点は、特に意味を明確にする必要のあるとき以外は付けませんでした。
3. ルビについては、小学校高学年レベルの国語力で読めるように配慮しました。ただし、難しい漢字であっても一つの歌詞の中では初出時にのみルビを打ちました。
4. 聖書からの引用、用語や表現については『聖書・新改訳』第三版を参照しました。
5. 原曲の韻律をできるだけ尊重し、同時に各節の間に韻律のずれが生じないように配慮しました。
6. 日本語のアクセントとメロディーの高低の一致にも一定の配慮を払いました。

しかし、讚美歌詞の性質上、これらの方針を一律に当てはめることはせず、作詞者、翻訳者にも裁量の余地を残しました。また、既存の作品については、特に許可をいただいたもの以外は、上の方針に合わない場合でも手を加えることをせず、そのまま掲載しました。

作品によって、漢字、おくりがな、ルビ、句読点など、表記に違いがあるのは、このような理由によるものです。

末尾の「アーメン」について

会衆が歌うすべての讃美歌の末尾に一律にアーメンをつけるという習慣は、ラテン語讃美歌に関心を寄せた 19 世紀の英国国教会に始まり、やがて教派を問わず欧米に広まりました。日本ではその影響により、1931 年版の『讃美歌』ですべての讃美歌にアーメンが付けられるようになりました。しかし現在の欧米の讃美歌集から、この習慣は消えつつあります。

この歌集では、伝統的にアーメンをつけて歌われる「頌栄」「祈り」の讃美歌や、原作者（作曲者、作詞者）が意図してアーメンをつけていることが分かる場合にはアーメンをつけていますが、「すべての讃美歌の末尾にアーメンをつける」という方針は採りませんでした。